

連載



金（ゴールド）相場が足元で急反発しています。2025年に6割超の上昇を記録した金価格は、26年前半に大幅に調整する局面もありましたが、8月の金先物価格（CMX）は月間で9.8%上昇し、年初来で2.4%のプラス圏に浮上してきました（図表1参照）。25年の大幅な上昇による過熱感が払しょくされつつあることに加えて、世界の中央銀行が外貨準備を米ドル資産から金にシフトする動きが継続するなど、構造的な金需要が相場を支えているものと思われます。

25年以降、国内投資信託市場でも金価格に連動するファンドの設定が多く見られましたが、今年8月にも2本が新規設定されるなど、その動きは足元でも続いているようです。投信評価機関モーニングスターのデータによれば、金関連ファンド（単一のコモディティを投資対象とし、ファンド名に「金」または「ゴールド」が入っているものを抽出）は8月末時点で40本まで増加しています（25年末時点で34本）。こうした金関連ファンドの25年末時点の残高は2.7兆円でしたが、ピークとなった今年2月末に3.8兆円まで急増しました。その後、金相場下落を受けて6月末時点では一時3.1兆円まで減少していましたが、直近の8月末時点で3.4兆円まで急回復しています。ただし、その主因は相場上昇によるものとなっています。

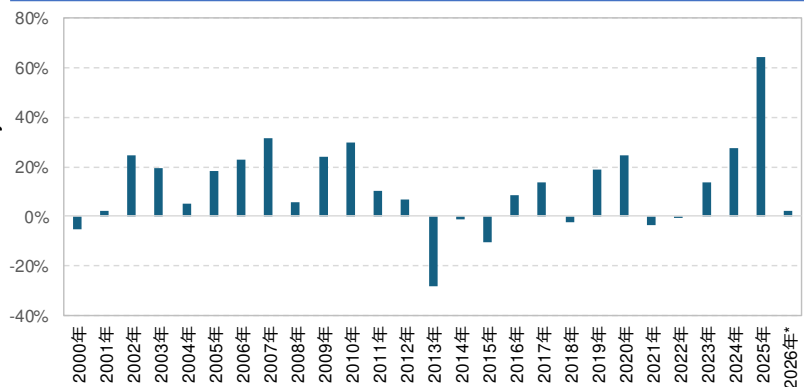
金関連ファンドの資金フローを見ると、26年1-3月で計6,200億円の高水準の資金流入を記録した後、6月には500億円超の資金流出に転じ、7月以降は緩やかな資金流入となって

います（図表2参照）。3月に金価格が急落した場面では押し目買いの動きも見られましたが、その後は株式相場が反発する中で金相場の低迷が続いたことから、短期的な金価格の上昇を狙った資金が入りにくくなった状況と考えられます。

なお、金関連ファンド以外にも金への投資配分を高位に保つアセットアロケーション型（バランス型）ファンドも年前半にかけて多くの新規設定が見られました。こうしたアセットアロケーション型ファンドでも金価格の下落の影響を受けたものが多かったはずですが、金への資産配分について分散効果や資産防衛などその目的がきちんと認識されていれば資金フローにそれほどの変化は見られないでしょう。そういった意味でも、短期的な値上がりを追求した金投資という観点では、やはり年前半の金相場低迷の影響も大きく、昨年から今年3月までに見られたような資金流入水準の回復には時間がかかるものと思われます。

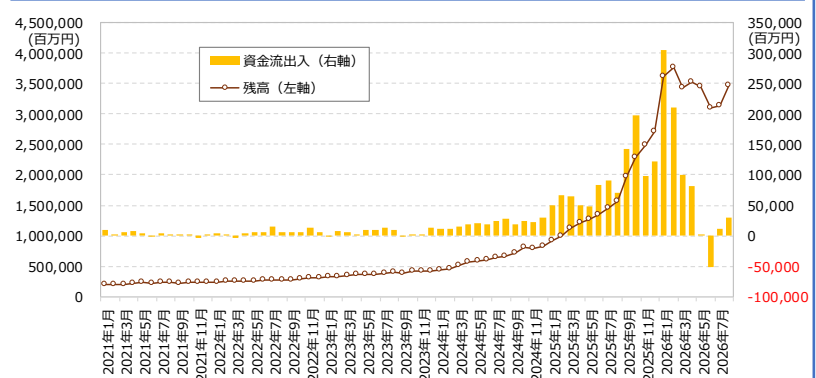
（執筆：BNPパリバ・アセットマネジメント
マーケティング部 部長 藤原延介）

図表1 CMX金先物の年間騰落率



出所：ブルームバーグのデータを用いてBNPパリバ・アセットマネジメント(株)が作成 ※2026年は8月31日時点

図表2 金関連ファンドの残高と資金流入（2021年1月～2026年8月）



出所：Morningstar Directのデータを用いてBNPパリバ・アセットマネジメント(株)が作成